
ノーマルによるスペシャルの為のアブノーマルなマイナス

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーマルによるスペシャルの為のアップノーマルなマイナス

【Nコード】

N9474Q

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

人吉のクラス、一組に転校してきた彼・天地^{てんち} 逆は「普通^{うしろ}」と言
い張るにはちょっとおかしな子で・・・？ 生徒会戦拳からは
ば作品に沿ってかいてます。【】十六話から沿ってません。

零組編あらすじ：突如やってきた「零組」は、箱には学園の破
滅とぶち壊しにやってきた！？ それを止めるべく、いざ生徒会は
立ち上がる！ お詫び 話数が大きく間違っていました。誠に
失礼しました。

オリジナルキャラクター紹介

挿絵あり(前書き)

ネタバレですよ。

オリジナルキャラクター紹介 挿絵アリ

天地 逆

> i 2 2 2 0 3 — 2 2 0 7 <

間違つて一年一組に転校してきた過負荷^{マイナス}。
間違つて一年一組に転校してきた過負荷^{アンリターン}。
「真つ黒な真実」という能力を持つ。

天地 直

> i 2 2 2 0 4 — 2 2 0 7 <

幸せになるために、一年十三組に転校してきた。
元マイナス十三組。
「九死に一生^{ハッピーキラー}」と言う能力を持つ。

死之誤 引壊

> i 2 2 2 0 2 — 2 2 0 7 <

新たに新設された零組^{ゼロクラス}。
当人曰く「この学園をぶつ潰しに来た」らしい。
「死角形^{ダイス}」を所有。二年。

哀来 無々

> i 2 2 4 2 5 — 2 2 0 7 <

引壊と同じく零組に転入。一年。
「孤高の哀人^{ベストラヴアー}」を所有。

瀧竹 浮友

> i 2 2 9 6 1 — 2 2 0 7 <
敬語を使う転校生。

「失敗」「ミス」などが口癖。 三年。

「スルー・スルー宇宙不友」を所有。

剎那 遊

> i 2 3 4 9 6 — 2 2 0 7 <

浮友と仲がいい。 三年。

「ミスフェア不幸平」を所有。

高川 否奈

> i 2 3 4 9 7 — 2 2 0 7 <

一年。

「ニゲイション否定」を所有。

死四師 靈子

> i 2 3 4 9 8 — 2 2 0 7 <

二年。

「デザイアート志望推定地獄」を所有。

灰屋 少雨

> i 2 3 4 9 9 — 2 2 0 7 <

二年十三組。 選挙管理委員。

第一箱：「僕はああいっ」

転校生が来た。

名前が、おかしい奴だ

人吉談。

「ハジメマシテ。天地、天地てんち 逆さかって言います」

「!?!」

俺のお母さんまで驚くつつう事は異常なまでだな。
みんなが目を見張るように驚いた。

「ふむ。異常な転校生か。」

「ああ 理事長の思惑かなんかか？」

「いや、それは私にもさっぱりだ。一度連れてきてはどうか？」

「……廊下に居るんだけど」

「準備いいな、流石私の幼馴染だ」

「カツ！嬉しくないな」

「ああ、入れてくれるんですねえ」

逆にはぱつと微笑んだ。

「はじめましてか。天地同級生」

「うん、そうですねえ」

「敬語はよせ」

「あはは、意外い」

「……」

めだかちゃんが黙った!?!

「すまん、善吉。誰かに似ててな。私には相容れない」

「えへへ。これ、受け売りなんだよねえ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、私の知る中では一人二人しか、おらんが」

「その中の誰かの受け売りだろおねえ」

「・・・・・・・・球磨川、楔」

「あはっ！あつたりい！！」

「っ！」

ざざざ、とふたりは後ずさる。

「わああ、そういつ対応やめてほしいなあ。だいじょーぶ」

「信じられんぞ」

「僕はああいう損傷マイナスは与えないよ。」

「信じられねえよ」

「ひっどいなあ、ふたりして」

そう言うなら壊壊してあげても良いよ？と囁ささやく。

「でも、安心して。生徒会戦拳の見物するだけだから」

「なぜそれを！」

うふふ、と笑う。

「じゃあね、めだかちゃん、善吉くん」

教えたはずのない、彼らの名前をつげ、逆は帰った。

第二箱：「ごめんなさい？」

「……………、球磨川、貴様まさか一人か？」
生徒会の特別制服を身にまとったためだから一行は、
受付会場に一人だけの球磨川に問う。

そして球磨川曰く。
他の彼らは海水浴などで夏休みを満喫しているらしい。

「球磨川さま、

ここに伏せられた十三枚のカードよりお好きな一枚をお選びくだ
さい。」

選挙委員の長者原が言う。

『じゃあ已だ。縁起を担いで蛇で行こう』

そして、選んだのは

「毒蛇の巣窟かあ」

まだカードを見ていない、そしてそのばにいるはずのない
逆が呟いた。

望遠鏡を持って、屋上にいた。

「流石球磨川さんだよねえ。いいのをひくじゃん」

それで満足したのか、逆は何処かに行ってしまった。

「こ、こんな所で戦うの!？」

古賀が叫ぶ。

「ですが、球磨川さまが引かれたのはこのフィールド。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

死傷者は事故扱いか。

人吉母・瞳が振り返る。

「そつだよね、やつぱり」と逆。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・生徒会関係者以外は立入禁止となっております
が」

この沈黙の中、長者原が唯一口を開けた。

「ああ、ごめんなさい？ 幾ら何でも球磨川さん一人じゃ心細いと思
つて」

逆がいう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・天地同級生・・・・・・・・」

「あれあれ？ 帰った方がいいのかなあ？ 残念だけどさあ」

「そつだな、今すぐにか」

えらないでください」

めだがが、そう言った。

「うんうん、ありがとね」

それに対し手を叩き拍手をする。

「なっ!？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・この声は逆ちゃん?』

球磨川が反応する。

「やつほー！ 球磨川さん！ 学校がわの手違いで遅くなっちゃったあ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・どういことだ?」

第三箱：「あつちが不利ですから」

庶務戦は逆に構わずに続けられた。

「おい、天地」

名瀬、もとい。くじらが話しかける。

「なあにい？くじらちゃん」

これまた教えてもいない彼女の名前を告げた。

「お前のマイナスは何だ？」

「えー？教える意味は？僕に利益は？」

「ない。」

「いいよお、教えちゃーう」

「！？」

普通利益がなけりや教えねえはずじゃねえのか？

「僕のマイナスは君たちの不幸から生まれてるんだよ」

そう言った。

「……不幸だと？」

「うん。くじらちゃんみたく、」

不幸を望んでいる人と一緒にいれば尚OKだね」

「……」

「あー、僕が教えられるのはここまでだよ。

あとは庶務戦を楽しもうじゃないか？」

「……あぁ、そうだな」

くじらは曖昧な返事をした。

そんなとき。

「そんな今わの際みたいなこと、言うなあっ！！」と。メダカが、叫んだ。

「そろそろケリつくかな。」
逆は嬉しそうに振り返った。

『お、うおっ 気持ち悪っ 』
善吉が震脚で金網を一気に下に下げ、
ハブのところまで無理矢理落とした。

そして

「あーあ、二人とも死んじやったかな？」
クスクス、と笑う。

「お、おい！お前の力じゃどうにかなんのかよ！？」
「んー？善吉くんが生き返る事によって、

不幸になる人っていないでしょ。」
「じゃあ使えないよ、と嘯うそく。」
「クッソ！」

生徒会戦拳が終わった頃にまたおいで
もうめだかちゃんを泣かせちゃあ駄目だよ

そこで彼は目覚めた。

「善吉iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ！」

「iiiiiiiiiiii!?!」

「.....」

「こりゃ、ダメだ。」

「まさか、あの球磨川があんなに取り乱すなんてめだかが振り返る。」

「そうだな。相当キレてたんだろーな」

「くまがわっさーん。お疲れ様でしたあ」

『ああ、うん』

「次は誰が出るんですか？」

『実は君に出てもらいたんだけど』

「あはっ。冗談やめてくださいよ。」

僕の過負荷ちからじゃあ、あつちとは相手になりません
戯言混じりにそう言った。

「あつちが不利ですから」と。

第三箱：「あっちが不利ですから」（後書き）

つか、金網にハブが踏まれてぐしゃぐしゃになるんじゃない？

安心院さんのセリフ曖昧

第四箱：「あたしの過負荷へマイナス」は

第二回戦。

書記戦。

志布志 飛沫 VS 名瀬 天歌（黒神 くじら）

この試合にも、部外者であるはずの逆がいた。

「なあ、天地同級生」

「なあに？めだかちゃん。」

「何故貴様は、球磨川についたのだ？」

「惚れたんだよ、彼の弱さに。」

「……」

「あはははっ。強さじゃ無いかって？過負荷は弱さが強さなんだよ」

「言っている意味が分からんな」

そういつてめだかは名瀬に視線を戻した。

書記戦も後半に差し掛かった頃だった。

名瀬は、あの状況で

「『素晴らしいものは地獄からしか生まれない』」

「この俺、それが名瀬天歌の主義主張だったんだけどよー」
と。

包帯をぐるぐると体に巻きつけて“まるで手術のあと”の様な名瀬

が言っ。

「こりゃあ、ちょっとばかり修正が必要かもしれねーな」
手のひらの上には 氷。

「なにせ、こおんなおぞましい過^{もの}負荷が、
今地獄^{じごく}で生まれちゃったんだもんなああー！」

「ぐっ……、

この逆境でいきなり過^{マイナス}負荷が発現するとか……、
ありえねえ！」

凍りついた自分の手を抑えながら志布志は言った。

そうだ！こんなトリックに決まってる！ と続けた。

「おいおい傷つくこと言うなよ。

俺は俺を改造^{いじくりまわ}したんだぜー」

「……………！！！」

「名瀬先輩が過^{マイナス}負荷を発現……、

いや作った？自身を改造して？」

そんなことが可能なのか、と善吉が言っ。

「……………」

そして。

『怯えてんじゃねーよ、志布志！』と。

球磨川も。

『「凍^{アイスファイア}る火柱」は身につけたばかりじゃねーか！

つまり、使い慣れてねーってことだ！ビビることあねえんだよ！

『！』

「！！！」

『……だっけ？名瀬さん』

と球磨川は意味ありげに微笑んだ。

「……野郎、

意趣返しのつもりかよ。意外と根に持つタイプか……」
と嘆息した。

「球磨川さん……」

そうだ……、こいつがどんな過負荷マイナスを身につけようが……
トリックだろうがなんだろうが、関係ねーじゃねーか……

「ふうん。球磨川さーん。」

『何だい？逆ちゃん』

「この試合……」

『ああ、分かってるよ。』

「うおおおおお！！！」

氷を操る？それがどうした！

『他人の古傷を開く』という、

あたしの過負荷マイナスはもとより絶対零度だ！！！

「『スカイデッド致死武器』！！！」

第五箱：「負けを認めて」

ハア、ハア、と息を切らしつつ名瀬の方へ目を戻す。

「!？」

「しゅっ……、出血してない!？」

名瀬はただ、佇んでいた。

「不発……? いや確かに傷口は開いた!なのに……」

「……お前のスキルは防ぎようがねーからよー、
せめて、開いた傷の方をこっやって

ピキピキに凍らせて塞がせてもらっことにしたのさー」

「!!!!」

名瀬の傷は氷によって塞いである。

「血じゃなく皮膚や血管を凍らせたのか!？」

「そんな高度医療みてーな真似を……」

「名瀬さんらしい解決策ね。」

と、瞳が言った。

「傷つくこと前提でどう戦い続けるかを目論むなんて……」

「そういう子なんだよ、」

名瀬ちゃんは。無傷で何かを得ようなんて絶対に考えない」

古賀が言う。

「名瀬ちゃんお心はいつだって、痛みと共にある」

「何を呆けているのです、志布志さん！」

肉体が無理なら『心の傷』を開けばよいでしょう！！」
蝶ヶ崎が言う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・それならもう既にやってるぜ、しかし
「そう、しかし通じねー。何故なら頭を冷やしたから。」

「ふうん、体温を操る能力マイナスがあ、

厄介だねえ、“志布志ちゃんにだけ”」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『がっかりだよ、名瀬さん』
と。

球磨川が。

『こうして敵対した今でも僕は仲間だと信じていたのに。
そんなバトル漫画の主人公みたいな
格好いい能力を身につけるなんて
僕は、頭がいいだけの君が好きだったよ』

そして、ため息まじりに、

『追いつめられたら奇跡的に新たななるパワーに目覚めるとか、
そーゆーのは、週刊少年ジャンプの中だけにしてほしいよね
僕に言わせればそれはただの幸せプラスだ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

名瀬は球磨川の言葉に目を伏せた。

「球磨川、漫画脳のお前にひとつだけ、教えてやる」

「努力が実を結ぶことを、現実こじじゃあ奇跡とも、都合がいいとも言わねえんだよ」

「この程度で追いつめられたつもりはねーよ」
俺はもつと酷い環境マイナスに追いこんできた、と。
だから、これは。
過負荷マイナスなのさ、と。

人の頭越しに言いたいこと言いやがって……
だが確かに！こいつの凍る火柱マイナスの前では
あたしの致死武器マイナスは無意味……
あたしの敗北はマイナス十三組の敗北！球磨川さんに『勝ち』を
頼まれたんだ！！

『志布志ちゃん、いや、もう、負けちゃって』
「！！！」

めだかが球磨川の一言に反応し、球磨川を見る。
『負けを認めてみんなでこの学園を出ていこう』
『だから、せめてど派手に、めいっばい華々しく負けようよ』
その言葉に志布志は嘆息した。

「OK！」
と答える。

「負けていいなら過負荷あたしの修羅場みせばだ！！！」

第五箱：「負けを認めて」（後書き）

めだかは文字多いので、
ちよつとカットしたり。

全文真似るとちよさkk（ry

第六箱：「足掻くなよ」

「OK！負けていいなら過^{あたし}負荷の修羅場だ！！」
と、志布志が言う。

「！？」
すると。

「なっ……、『致死武器^{スカーデッド}』の効果がここまで！？」
ぶしゅうつう、と見物しているはずの皆から血が。

「私達にまで見境なく……！！？いや！どこかこれは
と、蝶ヶ崎が言う。
それに。」

倉庫までもが崩れ始めた。

「まさか、あちこちの修繕箇所をも『古傷』と見なした？
否！組み立てや施工さえも！」

と、長者原。

「そうか、十年ぶりのあのスキルですね！」
と蝶ヶ崎が微笑んだ様に言う。

「へえ、すごいなあ。志布志ちゃん。
当の逆は傷ひとつさえも開いていない。」

予想通り！球磨川くんったら勝敗を度外視してきた！
しかもコントローラブルな過^{マイナス}負荷を
持つ志布志さんのタガを外す形で……
と瞳は察する

「喰らいなあたしの、『憎武器^{にくしぶき}』……、
『バズーカー・デッド』！！！」

「……俺もあんま人のこと言えねーけどよー」
と、名瀬。

「勝ち負けはともかく、後先つてもんを考えろよ、お前はよー」
啞然とした表情の志布志に言う。

「俺が倉庫全体を凍らせてなきや、お前も今頃ペしゃんこだぜ」

倉庫は、名瀬の凍る^{マイナス}火柱によって凍らせられていた。

「足掻くなよ、一年子ちゃん。飛沫が吹雪に敵うはずがねえだろう」
「！」

「信じられない……」

一体どれだけスケールの大きな過^{マイナス}負荷なのよ……」

名瀬の力に古賀も驚く。

「私たちの傷も一つ一つ凍ってる」

「すごい……、私の傷まで……」

「これはこれで、見境なさというわけですかね」

「~~~~~っ!!!!」

大口を開け、驚く志布志に対し「さてと」と切り返す。

「お前の過^{マイナス}負荷は完膚なきまでに破ったし

これでお前の身ぐるみを完膚なきまでに剥げば俺の勝利か」とはいえ、と。

「やっぱり、うら若き女子の服を剥ぐというのは
気乗りしないぜ。」

ノリノリだ！

「あーあ、志布志ちゃん負けちゃったね『もう負けを認めます』だ
ってさ」

『いーんだよ、逆ちゃん。』

これで、さ、と不適に笑む。

「.....僕も悪い子で相当有名ですが、

やはり球磨川さんには平伏しかねません」

第七箱：「違っね」

「おいおい、まさか名瀬師匠。

あんな奴の言うこと信じねえだろうな……」

「ふっ、善吉よそれは杞憂というものだ」

あの人を誰だと思っている、と微笑む。

そして

「私の姉だぞ」

「だから不安なんじゃねーか!!」

「……」

名瀬は何か深く考えた様に志布志を見つめた。

「いいだろう、二十秒だけ視線を外してやる」

と言つて後ろを向いた。

「ただし、お前が可哀想だからじゃねえ。

一度過^{なかま}負荷になりかけた俺から

お前への最後のチャンスだ」

その言葉を聞きつつ志布志は体を起こす。

「ひひひ！だったら、そのチャンス！

ありがたく頂戴するぜ、名瀬先輩!!」

と、氷を持ち奇襲した。

「!!! やっぱりとしか言いようがねえーっ!!!」

「あの子！氷柱^{ひょうじ}をナイフ代わりに……」

まずい！どんな低温でも、氷を凍らせることはできない!!!」

「目には目！歯には歯！氷には氷だあ！！」
志布志の持った氷が名瀬を襲う。

「違うね、氷には炎だ」

後ろ向きのまま、彼女は言った。

もちろん、志布志は炎のせいで、黒こげだ。

「だーから、”体温操作”って言っただろうが」

低温にできるってことは高温にもできることなんだよ、と。

「ゆえに。」

どっちつかずの『アイスファイア凍る火柱』！」

「か……は……あ」

「氷柱ごと志布志の制服を焼き払った……、
すげえ、氷だけじゃなく炎まで完全にコントロールしてやがる」
と善吉が感嘆する。

「しかもちやつかり氷で手鏡を作ってるし、

どこまでぬかりないのよ、あの子……」
同じく瞳も感嘆する。

「やれやれ、最後のチャンスを逃したな。

お前がまともな人間になれる、最後のチャンスをよ」

倒れ込む志布志を背に腕くみをしている名瀬はそう言った。

絶対的、勝利。

「あーあ。志布志ちゃんおっしーなあ。」

『そうかな？頑張った方だと僕は思うよ』

「……………ふうん。あ、じゃあ僕いきますねえ。

茶番も見れたことだし。“あいすふあいあ”の研究もしないとね」
手を可愛らしく振って彼は去った。

第八箱：「改めまして、こんにちはっ！」

書記戦終了後ミーティング

「で、次は人吉先生に戦って貰う、で？
と、めだか。」

「異議あり！」

そこにちよこんと座っていたのは逆。

「天地！」

「え？あれ？名前教えたっけ？」

だが、何か。

雰囲気が違う。

「えーっと、改めまして、こんにちはっ！」

天地逆の双子、直すすみって言いますっ

「ふ、たごお？」

半信半疑な回答だ。

「ごめんなさい、あの子、嘘つきだから。」

信じなくてもいいよ。でも、めだかさんは知ってるよね

「ああ。終業式に転校してきた異常生アブノーマルだ」

「うん。」

逆とは違う優しさがあるように微笑んだ。

「逆があっちにつくなら、直はこっちにつく。」
力強い言葉だった。

箱庭学園が誇る一大植物園『木漏れ日』
四季折々の草花のみならず、地球上の植物の半分以上を展示する。
国宝級と言っても過言ではない施設でありそして。

生徒会戦拳第三試合 会計戦

『火付卯』の舞台である

八月八日

会計戦当日

『木漏れ日』南口前

「それでは皆々様。会場に到着いたしましたところで
江迎さまが選ばれた。」

『卯』の試合形式『火付卯』のルールを説明させていただきたく
存じます」

と長者原が丁寧に言う。

球磨川本人は全くやる気のなさそうな格好だ。

「あつれえ？直じゃーん。どしたの？こっちおいだよ」

「嫌だねー！馬鹿逆！」

兄弟喧嘩……。

「なんだ、天地い、お前、あっち側の女と知り合いなのか？」
志布志が問う。

「え？んーつとね。あれは双子の片割れだよ」
キャハハ、と笑う。

腕輪の爆弾が動き出した。

第九箱：「こういうのは」

善吉と瞳が歩いていると、

瞳が足に草木を絡ませ倒れた。

「いったーっ！なにやもう！

ちゃんと整備してるの、この園内！？」

雑草くらいちゃんと抜いときなよ！！、と草にキレる母。

「はは。球磨川に気をつける前にまず、

足元に気を付けねえとな、……て、え？」

その草木は。

バキバキ、と。

急成長しているのである。

襲ってくる草木をよけたが、捕まってしまった。

「ぐ、なんだ、これ！？植物が俺たちを襲ってくる！？」

「江迎ちゃんの過負荷マイナスをどうすれば、

こんなことができるの！？」

『土を腐らせれば。』

『つまり、腐葉土をつくる。

土を操ることは、植物を操ることとイコールなのさ』

不適に笑い言う。

『わかるかい？江迎ちゃん。』

ぐじゅぐじゅ、と。

土が腐る。

『名付けて、

『ラフラフレシア 荒廃した腐花狂い咲きバージョン！』

「やばいぞ、お母さん！このステージ！！」

「……………落ち着きなさい、善吉くん。」

「こつこつのはワクワクするって言うのよ」

と、ランドセルに手をやる。

「！！」

取り出したのは

「裁ちばさみ……………いや！剪定ばさみ！？」

「植物をいじくりまわすのは、

何も過負荷マインナスの専売特許って訳じゃないわ！」

バチバチ、と。

マザースタスク
お母さんのたしなみ
ガーデンゲアーディアン
庭弄りの守護神！！

「……………、

切ったり縫ったりするのが得意なのは知ってたけどよ、

切ったり揃えたりするのも得意だとは知らなかったぜ」

バラバラになつた植物を見て善吉はいった。

「裁縫も園芸も、料理も掃除も、得意分野よ」

顔をハンカチで拭いながら言う。

「お母さんを誰だと思ってるの、お母さんだよ？」

「しっかし、

物体を腐らせる過負荷マインナスで植物を奴隷化するとは、

さすが球磨川くんは発送が違いわ
敵に感心する、瞳。

「ステージ全てが敵か。」

ま、高校生相手にやちようどいいハンデでしょ
「

「……………球磨川さん、
どうも逃げられたっばいでーす。」

『逃がさないよ』
と。

『今日ばかりは小細工抜きだ。
正々堂々フェアプレー精神にのっとり、
全力で引き分ける!!』

「ふうん。」

逆と直が隣同士になって観戦していた。

「いいなあ、瞳さん。楽しそう」
と、直。

「いいなあ、球磨川さん。崖っぷち最高」
と、逆。

不敵にそう微笑んだ。

第九箱：「こつこつのは」（後書き）

更新疲れてきた

つか、飽きた

でも続けるけど

第十箱：「作戦成功」

十三年前
箱庭総合病院

心療外科という仕事が好きだったし

それ以上に誇りも持っていた。

もちろん、フラスコ計画の暗部は知っていたけれど

それでも、私が、計画を主導する『彼ら』に協力し続けたのは
異常と呼ばれる子供たちを、少しでも社会に馴染ませてあげたかっ
たからだ。

私自身、異常と呼ばれながら育った子供だったから、

おこがましいけれど、それが自分の使命なんだと、思っていた。

「人吉先生ー、そろそろ午後の診察を始めていただいてよろしいで
しょうか？」

ナースがドアから顔をのぞかせいう。

「あ、うん。お待たせ。もう準備できてるからいつでも
と、患者を見た。」

どこか、さみしい眼。

螺子やら、糸がズタズタになっている帽子をかぶった、ボロボロう
さぎ。

それに瞳は啞然とした。

だが。

ここで、止まってはいけない。

「……………、えっと、球磨川禊君でいいんだよね？」

『……………、はい。』

「緊張しないで、別に怖くないからさ」

と、微笑んだ。

「あ、私は君の担当医になる、人吉瞳！よろしくね！」

『……………、よろしくお願ひします。ところで人吉先生。最初に一つお願ひがあるんですけど』

不気味な口調でそう言った。

「ん？何かな？なんでも言つてよ、球磨川君」

『僕の症状は異常こじなもんだいしつて診断してもらえませんか？』

『お父さんと、お母さんに心配かけたくないんですよ』

「お母さん！いたぞ、球磨川と江迎だ！」

善吉の一言に我に返る。

そして、闘志を戻す。

もう一度切ると、二人が現れた。

躊躇はしない 喋る暇も与えない。

一瞬で決める！！

蹴りを一発入れた。

だが。

「!?!」

それは。

「なつ……………、植物で作つたダミー!?!」

だったのだ。

本体の球磨川は善吉を螺子で襲っていた。

「!?!」

「くまつ……………、がわつつ……………!?!」

『作戦成功、そして今だよ、怒江ちゃん。思いっきりやっちゃって』
「了解です」
江迎は力を注いだ。

ラフフレシア
荒廃した腐花 狂い咲きバージョン・・・
タイプ 「柵」^{しがらみ}！！

その大木は瞳と球磨川、
善吉と、江迎のふたペアに分けた。

かんかん、と響く音。

「植物の壁を作って私たちを分断するとか、
二人きりになりたいなら言ってくればいいのに照れ屋さん」
焦り混じりにそういう瞳。

球磨川は植物に着せていた服を着始める。

球磨川によれば、善吉に近づけたのは
心配をなかつたことにしたから、らしい。

「自分がなんのために生まれてきたのか、考えたことないの？」
瞳は、そう、問う。

「へええ。やるなあ、球磨川さん」

「だよなあ。さすがって感じ」

志布志と会話する逆。

「最高の不幸だよね」
^{シユチコエーション}

第十一箱：「苦手なんだよねー」

『それが勝負の後に聞きたかったことですか？』

あはは、と笑って続ける。

『変わらないですねえ、

人吉先生。あなたは初めてあった時のまんまだ』

そして、また。

『あの時は見逃がしていただいてありがとうございます。』

おかげ僕は、幸せになることなく今日まで楽しく生きてこれましたよ』

瞳が睨むのも気にせず続ける。

『ところで、その後。』

噂で医者をやめたと聞いたんですが、

何か嫌なことでもあったんですか？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『そういえば、この状況もあの時に似てますね。』

彼が心配でしょう？百円くれたら彼のことを保証しますよ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・、」

全然違うわよ球磨川くん。

善吉くんはもう子供じゃない。ひとりの、一人前の男よ」

この前の庶務戦で確信したわ。あの子にはもう母親の過保護は必要ない」

善吉は、腕についている爆弾を見た。

44:44:44。

「江迎、降参するなら早めにしとけ」

善吉が言う。

「今日の俺はなんだか、目の色が違うんだ」

「……………?目……………」

「なあ、直い。^{すすみ}どっちが勝つかな」

「愚問だね。これは引き分けた」

「!?!」

直の一言に一同は驚く。

「あれ?何?」

「球磨川の様なことは言うな」

めだかが言う。

「んふふん。大丈夫、僕のカンは外れないよ。」

“誰も死なずに” “これは” “引き分ける”!

「?」

「んま、球磨川の旦那次第だね。ふふ、お楽しみい」

不敵に笑んだ。

「直同級生。貴様はどちら側なのだ?」

「ん?前言ったとおりだよ?君ら側。」

仲間とは言つてないけどね」

「……………」

「なんか知らないけどお、

直つて、友達作るの苦手なんだよねー

。あ、ほらほら。なんだっけ?」

「自分を自分と思つてないから」

逆^{さか}が言つた。

「うん、それぞれ。客観的に観るつていうかな?悲観的?」

「貴様、それでも……」

「みなまで言わなくていいよ。直は直だ。」

どんな批判をされようと、妹好きの誰かさんと変わらない。

直は誰にも動かされない。孤独でいいよ。」

「……」

さすがのめだかも、沈黙。

「うふふ。元々直はマイナスクラスだったからね」

直はそう、微笑んだ。

第十一箱：「苦手なんだよねー」（後書き）

無理矢理本編に合わせようとしたら
オリジナルが大半を占めてしまった。

第十二箱：「僕の恋は本物だったんだ」

「いいから今回はもう帰りなさい、人吉君」

ロングヘアの少女はいう。

「視力については僕がサービスしておいてあげるからさ
もうめだかちゃんを泣かせちゃあダメだよ。」

「なあに、大丈夫さ。“僕が貸す、その目があれば”」

！！

善吉は江迎の二丁包丁を最小限の動きで交わしていた。

そして、ついには彼女の包丁を足で撃ち落とした。

「！！！」

それは木々に刺さり江迎の手に戻ることはなかった。

「さつさとあれを引っ込めな。お母さん一人にあいつを任せるわけ
にいかねーんでな」

「あんまりお母さんお母さん言ってる、女子からマザコンだと思
われちゃうよ」

「マザコン？息子が母親を愛するのは当然のことだ」

江迎へと走りながら

「俺はお母さんが大好きだ！それを恥ずかしいとは思わない！」
といった。

そのころ。

瞳は着々とピクニックの用意をしていた。

『それは一体なんの真似ですか？』

「だって引き分け狙いなんでしょ？だからお茶でもしようと思ってる暖かそうなお茶をすすりつつ言う。」

「球磨川君もどう？恋バナしようよ、恋バナー」

『……わかってるんですか？引き分けは、あなたの可愛い善吉ちゃんが爆死することですよ？』

「んー、死んだらまあ仕方ないんじゃない？さっきも言ったけど彼も、もう子供じゃないんだし」

くるり、と逆をむいていった。

なんてね！

球磨川君にも感情があると分かった今、診療外科医わたしはそれを揺さぶれる！

「！！」

球磨川は血涙を流していた。

『さすがです。僕の感情をここまで揺さぶれるのは彼女を除きあなたただけだ』

「彼女？」

『はい、えーっと恋バナでしたっけ？あなたが初恋の人なら、彼女は最後の恋の相手です。』

今のところですけどね、と付け加える。

「可愛すぎた？顔がってこと？」

『はい。』

『だから、ちょっと、試してみたくなって』

『僕は彼女の顔を剥がしました』

『結果僕の思いは変わらなかった！僕の恋は本物だったんだ！！』
瞳はその言葉にゾクツとした。

『もつとも。マジギレしたためだかちゃんに追い出さたんですけどね』
球磨川は目線をカメラがあるのがわかるかのようにそちらをむいた。

『めだかちゃんは当時から空気を読まないですよねー。』

他人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて地獄行きですよ』

『きつとめだかちゃんは恋を知らないんだ』

あの子は人間が好きだけで、

人が好きなわけじゃないんですよ』

「人が好きなわけじゃない、か」

逆は頭の後方で腕を組んだ。^{うしろ}

「あれー？逆お。どっこいつくのぉー」

「え？暇だよこれ。何かの茶番？だあったら僕う、球磨川さんと代わって欲しいなあ」

その言葉に。

「何を言うー！！逆同級生！！！！」

メダカが激怒した。

「うふふ。嘘だよお。だああれも死にたい人間なんているわけないもんねえ」

クスクスとシニカルに微笑む。

「ぐ……っ」

しまった！自分で作った壁を自分の過負荷^{マイナス}で腐らせちゃった！！
という凡ミスを、モニター室でしゃべっている間に犯してしまった
江迎。

「あは！見てよ、逆お！」

「ホントだ！面白ソー」

それを他人事のように眺める双子。

第十二箱：「僕の恋は本物だったんだ」（後書き）

お久しぶりです

真面目に更新してなかったので原作に置いてけぼり喰らいました。
い、痛くないぞ

第十三箱：「俺は」（前書き）

申し訳ないですが

諸事情によりいろいろ省きます（黙れ

第十三箱：「俺は」

『怒江ちゃん、日之影君がなぜ強いかわかるかい？』

「え、それは、ミスターアノウン知られざる英雄というアブノーマル異常があるから……」

『いいや、違う』

そういつて、江迎の手を取る。

そして、そのまま地面へ。

『サイズ体が大きい。強さの理由にそれ以上はないよ』

ラフフレシア荒廃した腐花 狂い咲きバージョン

タイプ『千年杉』！！

「じよ、冗談じゃないわ！完全に想定外よ」

瞳が言う。

「まさか、江迎ちゃんがここまでマイナス成長を遂げるなんて！！」

「お母さん」

その言葉を遮るように善吉が言う。

「二十秒でいい、あの巨大植物を食い止めてくれねえか」

「善吉君？」

「江迎はもうほぼ余力は残ってなさそうだし、球磨川は手を出す気無さそうだ」

つまり。

「今は江迎と対話できる。最初で最後のチャンスなんだ。」

「対話って……、なにそれ、めだかちゃんの真似事？」

「……いや。残念ながら俺はあいつと違う。すべての人間を幸せにしようとなんて思わねーし思えねー」

幸せになるうとしない奴とすることなんて出来ねえよ、と続ける。

「でもあいつはいったんだ。不気味な言葉だったけど、不器用な言

葉だったけど、

必ず幸せになるって、幸せになりたいって言ったんだ！」

「幸せになりたい奴がいるなら誰であろうと幸せにしてやる。

それが俺の考える、生徒会執行部だ！！」

「できるの？そんなこと。」

「カッ！」

と、その言葉を払うように言う。

「愚問だな、お母さん。俺を誰だと思っている」

そして。

「あんたの息子だぜ」

ニツ、と笑った。

「オーライ！いいでしょう！この際、二十秒なんてみみっちいこと
言わず！

十分は持たせてあげるわよ！善吉くん！！」

と、チェーンソーを出した。

「あとは、若い人同士ということであええ！年寄りも！盆栽でもして
くたびれてるわ！」

「はっ……、矢でも鉄砲でも、チェーンソーでも持ってきなさいよ！」

私は、球磨川さんの為に、全身全霊で引き分ける！」

「『ラフラフレンシア荒廃した腐花』！！！」

「『ガーデニングガーディアン庭弄りの守護神』！！！」

「ぐっ……、はあっ……、大丈夫、まだいける」

ザツ、と誰かがいる気配を感じた。

見上げるといたのは善吉。

「なによ人吉君。あっち行っててくれない？あなたと話すことなんて、何もないんだけど」

ゼエゼエ、と息を切らせつつも強がる江迎。

「……俺ん家の庭ちに、一本の古い桜の木があるんだ」

「俺は、ちっちゃな頃、春が来るたびにその木の下で行われる花見を楽しみにしていた。

しかしその木も、いつからか花を付けなくなっさ。

お母さんでもどうしようもなかったのかな

今じゃすっかり、立ち枯れちまったよ。

幹だけになったその気を見るたび俺は悲しくなる。」

「……」

「だけど、お前なら、もう一度。あの桜を咲かせることができるかもしれない」

そう。

江迎の周りの花々はまるで春かのように咲き誇っていた。

「わかるか？江迎。お前のその過負荷マイナスと呼ぶその才能は、そうやって使うことも出来るんだぜ

お前がそんなふうに自分の才能を使ってくれと、俺はとても嬉しい」

そして、手を差し出し言った。

「そんなお前となら、俺は、友達になりたいと思う」

「……やめてよ、私に手を差し伸べたりしないでよ。そんなことしても無駄なんだよ」

ポロポロと涙をこぼしていた。

「球磨川さんは、差し伸べてくれただけじゃない！手を取ってくれたんだ！

どんな酷いことをしても、なかったことにしてくるっていったんだ！！」

「俺は！」

と、江迎の手を取って言う。

「お前がどんな酷い事をしてても！それをなかったことにしない！今ここにいるお前を！いな^{マイナス}み^{マイナス}たいには扱わない！

だから、お前も！

自分を駄目^{マイナス}みたいに言わないでくれ！」

植物で出来た怪物は、ビキビキと音を立てて壊れ、倒れた。

善吉の手の腐敗は進む一方だ。

なのに、まだ握っている。

「死んじゃうの。私が触ると、みんな腐って死んじゃうの

私も、死んだほうがいいのかなあ」

「いいわけ、ないでしょ」

コツン、と瞳が江迎の頭を軽く殴る。

「十三年前も言ったはずよ。怒江ちゃん」

第十三箱：「俺は」（後書き）

記念すべき十三話！

著作権にかかわるもんだいで

何かお有りでしたら、一言ください。

消すなりなんなり処置をいたしましょう。

第十四箱：「それでは」

「……………先生、瞳先生……………私、幸せになってもいいんですか？」

「当たり前よ。」

あなたみたいな子を幸せにするために私は診療外科医をやっていたんだから」

「そして、お前みたいな奴を幸せにするために。」

俺達は生徒会執行部をやっているんだ」

そして、笑顔でこう続けた。

「悩み事があるのなら、目安箱に投書しろ！」

「二十四時間三百六十五日！」

“俺達”は誰からの相談でも受ける！！」

「ありがとう、人吉君。ありがとう、瞳先生。私」

「！！」「！！」

ドスドスドス、と螺子が二人に突き刺さる。

「球磨川君！？いきなり何を！？」

『……………』

不機嫌そうに言う。

『善吉ちゃんの両手の腐敗、と、

怒江ちゃんの過負荷ラフラフレックをなかつたことにしました。』

『怒江ちゃんはもう普通の女の子です。

どうか一組あたりで引き取ってあげてください』

「どういうつもり？あなた引き分け狙いじゃなかったの？」

と、瞳が問う。

それにまた。

まだ不機嫌そうに言う。

『やだなあ人吉先生。』
と。

『人を助ける理由なんて、「気に入らないから」で十分でしょう』
瞳に背を向け言う。

『過負荷を過負荷でなくすなんて』

『簡単なことだって僕は善吉ちゃんに教えてあげたかっただけですよ』
「あらら、

何かと思えば負け惜しみ？球磨川君からそーゆー台詞は聞きたく
なかったなー！」

江迎の方へと向い、鍵を探す。

「まあ、それでもお礼は言うわ。これで善吉くんの爆弾は外せる。

私達の勝利ね」

『さて、どうでしょう？僕は別に諦めたわけではありませんが』

「？何を言ってる、！？」

善吉の爆弾には。

「なにこれ、鍵穴がない！？さっきまであったはずなのに！？」

『鍵の破壊は反則負けしそうなので、“鍵穴の方をなかったことに
しました”

もちろん、僕の方からも既に消してあります。

ですから時間内に爆弾を止める手立ては』

瞳に鍵穴、もとい。

なんの穴もない爆弾を見せ言う。

『もうありません』

『これでこの会計戦！引き分け以外の決着はなくなりました』
悪魔のような笑で言う。

『あ、それではみなさんご唱和ください』

ピ。ピ。

時間は。

残り一秒。

めだかが画面にかじりつく。

そして。

『It's All Fiction!!』

爆弾は轟音を立てて爆発した。

第十五箱：「よかったあ」（前書き）

この小説さり気なく消したらボコられますか？

第十五箱：「よかったあ」

時限爆弾内蔵式ブレスレット

スリーピングビューティー
『いばら姫』

書紀戦で使用された、手錠と同じく、

風紀委員からの、提供品である。

この腕輪の内部に、仕込まれている火薬自体はごく少量で、

手榴弾などと同じく、爆風ではなく飛び散るそれ自体の

破片によって対象の殺傷を目論む作りとなっている。

しかし、それは。

裏を返せば、

“破片を飛び散らさえしなれば”

この爆弾の威力は知れている、ということでもある。

そう、たとえば。

爆発する直前に、ブレスレットを全身で包み込むようにすれば

『う、うわああああああああああああつ！！怒江ちゃん！？』
江迎の腹部はひどい有様だった。

『な、なんだ！？さっぱりわからない！！一体何が起こったんだ！』
？

「……………信じられないことが起きたのよ。」

球磨川君、あなたみたいな子には特に信じられないことがね」

「黒神、今の、見えたか？」

球磨川は顔を抑えて悶えいた。

「喋っっちゃ駄目だよ江迎ちゃん、いや！」

「やっぱりそのまま喋り続けて！意識をしっかりと持って！」

「・・・えへ、なんだか、人吉君の言うとおりだったなあ」

空へと手を伸ばしつつ言う。

「よかったあ、私、誰かの役に立ってもいいんだあ」

第十六箱：「無理に決まってるよお！」（前書き）

この話は完全オリです。

原作を大事にするk（ry

第十六箱：「無理に決まってるよお！」

「幸せになっていい、か」

直すみが一言漏らす。

「めだかさん」

と切り返す。

「なんだ？直同級生」

「さつきはごめんなさい。

直がマイナスを抜けたのは

幸せになるための一歩を切り開きたかったから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「直もこの戦拳を通じて、幸せになる。

だから、ごめんなさい」

めだかはふっ、と微笑んで、

「何を言う。マイナスでも、アブノーマルでも。

誰でも幸せになることができるのだ！」

江迎同級生を見る、とモニターを指さす。

「彼女もマイナスだ。きつと幸せになれる・・・」

「そう、だね」

「はあ！？」

「？」

「誰でも！？そんなの無理に決まってるよお！

球磨川も幸せにするのかあ！？

ふ、ふざけてやがるよ！！」

逆さかが。

「こんなの、茶番じゃねえ！

ただのお遊びだ！」

と言いつつ、モニター室の壁に手を当てた。
「ダメだ！逆！！やめ」

「……………」

「モニター室から轟音!?」
当の部屋からは煙が上がっていた。

四人がまばたきをした瞬間。

その次の瞬間に逆は彼らのもとにいた。

「つまんねえ茶番、否、お遊びだったね。

俺の目が腐り果てるどころだったよ」

「直同級生！な、なんだ、今の！」

「うあああ！早く止めないと球磨川さん

善吉くんもろとも死んじゃうよ！」

「何!?!」

「逆は短気で更にあんな悪いものマイナスを持つてる！切れるとやばいよ！

！」

「ま、間に合わねえぞ！」

名瀬が逆が空けた穴から覗く。

「めだかさんと直だけで十分だ！

めだかさん、直の肩に触れて」

それに従うと二人は瞬間移動したかのように消えた。

「ごめんなさい、ちょっと痛かったかな」
これもまた、瞬く瞬間に着いた。

「い、いや、問題ないぞ」
ふらついているけども。

「……………直」

苛立ち混じりに逆がそう言った。

第十七箱：「始まりであり、終わりの。」（前書き）

この話から原作沿うのやめます。
追いつかねえし疲れた。

第十七箱：「始まりであり、終わりの。」

「はあいはーい、そこまでー」

「………!？」

「あれー、はじめましてー?じゃあ、こんにちはー。
あたしい、『死之誤しのひまち 引壞ひくま』つていいますー」

「誰だ、貴様」

「こんにちはー、生徒会長さんー」

「誰だと聞いている」

「アハー、安心して、どっちとも仲間って訳じゃあないからさー」

「ひーちゃん!」

直が声を漏らした。

知り合いらしい。

「やつほ。まあ、とりあえず。一旦終わりですー」
強制終了させた。

「改めてー、こんにちはー。箱庭は初めてですー」

「それにしても気色ワリい、名前だな」
名瀬が突っ込んだ。

「それは、どうもー。最低の褒め言葉だよー。」
確かに、気持ち悪い名前かもしれないが。

「ええつとお、ゼロクラスに転校してきましたー」

「ゼロ？」

「はい！。」

「始まりであり、終わりの。」

「それは、どういう意味だ？ マイナスとは違うのか」

「うふふー。ご姉妹で質問攻めですかー」

「……………」

「まだ、姉妹とも告げていないはず。」

「それは、おいといてー。マイナスとは違うんですよー。」

「あそこまで最低じゃないし、貴方方みたいに出来てもいない」

「要するに何がいいてえんだよ」

「まあ、ま、くじらさん落ち着いてー」

「なだめる。」

「あたしたちは行き場のない、最低外道集団ですよー」

第十八箱：「孤独な存在」（前書き）

オリキャラたち

・天地逆てんち うちさか

マイナス十三組。「真つ黒な真実」アンリターン

・天地直てんち すすみ

十三組。「九死に一生」ハッピーキラー

・死之誤引壊しのご びきえ

零組。「死角形」ダイス

第十八箱：「孤独な存在」

「行き場のない？」

めだがが、またも口を挟んだ。

引壞は「むー」と不機嫌そうに答えた。

「マイナスでもなく、アブノーマルでもスペシャルでもノーマルでもない」

「誰にも相手にされない孤独な存在」

逆が言う。

「よくわかってるねー」

シニカルに笑った。

「まあ、あたしはいざこざを止めに来ただけ。

戦拳以外の戦闘は相容れないからね」

「お前には関係ないんじゃないのか？」

僕らの話だ、と逆が言う。

「君らの話としても、駄目だよ。

箱庭の一生徒として、阻止するね」

逆はチツと舌打ちした。

そして、出口の方へ足を向けた。

「おい、逆同級生！謝ったらどうだ？」

「生徒会長さん、無視したほうがいいよー？」

「なぜだ？」

「まだ憂さが残ってるみたいだしねー。

それはそうと、次の副会長戦に備えたらどうかな？」

「ああ、そうだな」

第十八箱：「孤独な存在」（後書き）

いろいろ微妙だ・・・

第十九箱：「選びません」（前書き）

オリキャラたち

・天地逆てんち うちさか

マイナス十三組。「真つ黒な真実」アンリターン

・天地直てんち すすみ

十三組。「九死に一生」ハッピーキラー

・死之誤引壊しのい ひきえ

零組。「死角形」ダイス

第十九箱：「選びません」

「結局。」

「ん？ひーちゃん、どしたの？」

「なんでもないよ。読者想像通りの結末でつままないのさ」

「ふうん」

と聞いた本人が曖昧な相槌を打つ。

「なあーんか、ちゃっかり日之影元会長が勝っちゃうしー」

あたし的にはつままないー、とうそぶく。

否、本音だろうか？

「お次はビックリドッキリ、会長戦！」

あたしは、結果わかつちやってるから欠席ー」

「もともと出席禁止だよ」

「ケチー！あたしも、選挙イーんちよさん口説こうかしらん？」

「も」？」

「あー、いや、なんでもないさねー」

方向転換し、ひらひらと手を振りつつ帰った。

「あたしは、イーコちゃんだから、早々と帰宅ーっ」

だ、そうだ。

「……………」

直は何か心残りだった。

カタタン。

響くキーボード音。

「む」

からり、とドアをスライドさせ、めだかが入る。

「直同級生。こんな遅くまで何事だ？」

「下校時刻はすぎておる。」

「ふわえー？あ、ああ。うん、えへへー」
ぼんやりして誰だかつかめてないらしい。

「私だ。黒神めだかだ。わかるか？」

「うぬー……、つて、え、めだかさん！？」

「下校時刻すぎてますよ！？」

「先程私がそう言った。貴様も帰れ。疲れが取れぬぞ」

「うなー……、ちよっぴり調べごとのハズが、二時間もお
ー」

「何を調べておるのだ？」

めだがが、パソコン画面を見ようとすると、モニター電源を切った。

「次の会長戦のネタバレですよ。お楽しみに」

不敵にそう微笑んで、パソコンを強制終了させた。

めだかは、不満そうに「ふん」と鼻を鳴らした。

会長戦当日。

「では、不知火様。」

用意された十三枚のカードからお好きなのをお選びください」
長者原が達者な日本語で言う。

「いえ、選びません」

あたしは戦うつもりはありませんから」

そして、微笑みつつ、球磨川を見る。

「代理として、リーダーの球磨川楔先輩を推薦します」と続けた。

もちろん、ブーイング。

だが。

「だから、当然、手は打ってあります」

バツ、と出した紙は、

「なっ！？それは委任状!？」

不知火はこの、生徒会戦拳のみ、自分へと全権を委任したのだ。

「暗躍どころじゃねえ・・・、

そんなの、ひとつの戦いじゃねえかよ」

と名瀬が驚く。

「・・・・・・そうですね、あれが、鍋島先輩との違いです」

「先輩はルールの裏をかくけれど、

不知火はルールを変えちまう!!」

「あたしからは、以上とはいえ、当人の意思も確認しないとねー」

勿論。

二人の意見は、「OK」とのことだった

第十九箱：「選びません」（後書き）

というか、本家今どうなってるんですか。

基本自分は従兄弟のお下がりを読んでいるので毎週読めてません。

誰か教えて、あ、でも、ネタバレは嫌だな・・・

第二十話：「こんな」（前書き）

オリキャラたち

・天地逆てんち うちさか

マイナス十三組。「真つ黒な真実」アンリターン

・天地直てんち すすみ

十三組。「九死に一生」ハッピーキラー

・死之誤引壊しのい ひきえ

零組。「死角形」ダイス

第二十話：「じんな」

「負けたと思ったほうが負けだ」

それが、会長戦のたったひとつのルールだった。

「つまんない、つまんない。あーあ、つまんなーい」

絶対安全地で二人の“仲のいい戦闘ごっこ”を見守る逆と引壊。

「そうぼやきなさんな。」

と、引壊が言う。

「つまんない、つまんない。」

つまらなすぎて世界を死角形でまとめたぐらいだよ」

「よく言うなあ。つーかさすが。お前だけある。」

「何事ー？」

「ゼロクラスだけあって話が合う」

「……………、それは、どうかな」

「そんな奴に負けてんじゃねえぞ、黒神ー……………!!」

お前を倒すのは、この俺だー!!」

「ピンチの時に敵が駆けつけてくれるのは、

この世でめだかちゃんだけだ」

善吉がそう唱えた。

そう、めだかちゃんを応援しにきたのは、日之影より少なかったが。だが。それだけではなく。

そこに居た全員が、敵であるということだった。

「綺麗事並べてくれるじゃん」

と、逆が。

「てめ！いつのまに!?!」

善吉が反応する。

その頃には後ろにいたはずが、前に移動している。

「やつほ、善吉君、お元気い?」

「ひーちゃん！来ないんじゃないかなかったの?」

「あたしは気まぐれなのよー」

ひらひら、とこれまた手をふる。

もちろん決着は。

めだかの、圧勝。

「はぁいつはーい、おめでとっさーん」

パチパチと、やる気なさに拍手する。

「これで一件落着って、思う?ねえ、そうだよね」

「.....?」

めだかが「何を」と言い始めた所で、

喉元にひんやりとしたモノを感じ取る。

「えっへへーん!こーんにつちわー」

哀来あいらい無々ななしです。以後よろしゅう

「誰だ?」

「ええつとお、宣戦布告しますねー」

「こんな廃れた、学園なんざ、ぶっ壊してあげちゃうねー」

第二十話：「こんな」（後書き）

基本、マイナス好きさん向けですから。

あ、この話から、完全オリ話に移行します。

第二十一箱：「あれからというもの」（前書き）

オリキヤラたち

・天地逆てんち うしろう

マイナス十三組。「真つ黒な真実」アンリターン

・天地直てんち すずみ

十三組。「九死に一生」ハッピーキラー

・死之誤引壊しのひ ひきえ

零組。「死角形」ダイス

・哀来無々あいらい なしなし

零組。「孤高の哀人」ペストラヴァー

第二十一箱：「あれからというもの」

「球磨川を倒したと思いきや、新しい敵、か」

めだかが、生徒会室でそう呟いた。

『めだかちゃん。僕も彼女らを知らない。』

と、球磨川が。

「本当か？それは対処しづらいな」

『いつそのこと、人吉先生に頼んだらどうだい？』

ほら、僕らみたく、検診受けてるかもしれないじゃないか』

「無理だよ」

そう、言ったのは。

逆だった。

『逆ちゃん……』

「僕は、“球磨川さんの”頼みしか聞かないからな」

『じゃあ、協力してくれるかい？』

球磨川がそう問う。

もちろん、答えは「……はい」だった。

「彼らは、瞳先生が、引退したあと。発見された人材だ」

そう静かに、言った。

「おう、おう。見ましたかあ」

「見ましたよう」
無々と引壞が会話している。
「んじゃ、どーしましょー。仲間はマイペースが多いし。
マイナス達を連れ込んだんじゃいますか」
「いやいや、だめですよ」と無々が止める。
「あれらには、邪魔者がいるじゃないか」
「そうだね、邪魔で鬱陶しいから、諦めようか。」
「そうぞ。来るまでじっとしておこう」
と言ってその場を去った。

「あれからというものの、音沙汰なし、か」
「たばたば、と紅茶をそそぎつつ。
めだかが言った。

「いいんじゃないの？平和ってことだよね」
喜界島が言う。

確かにそうだが。

『逆に、だよ。気持ち悪いっていう』
球磨川が続けた。

多分、誰しもが「お前に言う資格はないと思う」と考えただろう。
そんな戯言はさておき。

「本当にどうすればいいものか」

四人そろって嘆息した。

『ん？四人？そついえば善吉ちゃんは？』

「仕事だ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・？』

第二十二箱：「ミスです、ミス」（前書き）

オリキャラたち

・天地逆てんち うちさか

マイナス十三組。「真つ黒な真実」アンリターン

・天地直てんち すすみ

十三組。「九死に一生」ハッピーキラー

・死之誤引壊しのご びきえ

零組。「死角形」ダイス

・哀来無々あいらい なしなし

零組。「孤高の哀人」ベストラヴァー

第二十二箱：「ミスです、ミス」

善吉の仕事といえど、本当に簡単なもの。

ただ、生徒会室にいないだけで

本当は生徒会室前廊下にいた。

たばたばと花に水をやる地味な作業だ。

「ったくよお、結局俺は庶務のまんまだし……」
愚痴。

しかも独り言である。

「あの」

「ん？」

ふと声をかけられた。

見かけねえ生徒だな……

「ああ、すいません。ミスです、ミス」

「ああん？名前は？」

「ああ、自分は瀧竹たきたけ 浮友うきともと言います。

以後共々よろしく願いますよ……」

そう、不適に笑む。

「瀧竹え？知らねえ名前だな」

「それはそうですよ。だって自分は今日ここに来たんですから」
さすがの善吉も察したらしく、数歩後ずさる。

「おやおや、バレましたか。ミスですねミス」

「そうです、自分は零組所属。改めて宜しく願いますね」

ドツゴオオ、と壁に何か重くぶつかる音。

「!? 廊下にいるのは 善吉!？」

めだかが駆けつけると倒れ込む善吉。

と。

浮友。

「貴様誰だ？」

「あれ? ああ、自分としたことが二回目の失敗ですか。」

こんにちは。

生徒会長さん

「誰だと聞いている」

「……………しつこいなあ。自分は今答える気はしませんよ」

「……………」

「そこに転がってるモノでも起こして聞けばどうですか?」

「貴様」

めだかが拳を構える。

「ふふ。それはこちらに向ける気ですか? キチガイじみてますね。」

生徒会長だからといって、校内暴力は相容れませんよ」

その皮肉な一言でめだかは拳を収める。

怒りはおさまらない。

「それでは、自分の方へ怒りが来る前に退かせていただきますね」

「待つて」

それを止める。

もがなだ。

「なんででしょう? 会計係さん」

「……………どうしてこんなことするの?」

「愚問ですね。愚問は嫌いです」

と言って無視する。

そうして、めだかたちに背を向けた。

「あれー？浮友くんじゃあないかあ」

そこにいたのは。

「！？ 貴様は・・・」

引壊だった。

第二十二箱：「ミスです、ミス」（後書き）

先日ツイッターでようやく知ったんですけど
球磨川さん括弧戻したらしいじやないですか
編集しますね

あ、あと。

人物紹介更新しましたあああ

第二十三箱：「関係ないだろう」（前書き）

オリキヤラたち

・天地逆てんち うしろう

マイナス十三組。「真つ黒な真実」アンリターン

・天地直てんち すずみ

十三組。「九死に一生」ハッピーキラー

・死之誤引壊しのひ ひきえ

零組。「死角形」ダイス

・哀来無々あいらい なしなし

零組。「孤高の哀人」ペストラヴァー

・瀧竹浮友たきたけ うきとも

零組。「空宙不友」スルー・スルー

第二十三箱：「関係ないだろう」

「ひ、きえ二年生……」

「やつほー！あれー？生徒会の皆さんおっそろいでえ
きやらきやらと陽気に笑う。」

『……………』

「球磨川」

戦おうとしている球磨川を止めるめだか。

「引壞二年生！何の用だ？」

「それはー、こっちのセリフなんだよねー」

「何？」

「あたしのクラスの瀧竹君をお迎えに来ちゃったわけよー」
ざわめく。

「何皆さん驚いでるんですか？一応言っただはずですけども？」

そこのゴミにね、と微笑む。

ゴミ、否、善吉はめだかの肩を借りて立っていた。

「人をゴミ呼ばわりとはな！」

「おやおや、ミスですよ。失礼しました」

「瀧竹君、帰るよ」

「了解です。」

「全く図々しいったらありやしないー！」

「すみません」

「まあでも。接触できたんだね」

「そうですね。」

『パラサイトシーイング』
『欲視力』がなければ先程の男児も楽なものですよ

「なるほどね。でも君には関係ないだろう、瀧竹君？」
「……本当。あなたにはかありませんよ」

「ツテテ……」

「で、善吉。どうだったのだ」

「どうって……、そうだな、マイナスみてえな奴だったよ」

「マイナス、か」

『でもね、決定的に僕らとの違いがあるんだ』
球磨川が話す。

「違い？」

『うん』

それは

『それは、彼らが始まりだから』

「始まり？」

『そう』

「………確か、言ってたっけな」

始まりであり、終わりの。

あたしたちは行き場のない、最低外道集団ですよー

「あれは、そういう意味だったのか？」

『最も、一番のはじまりはあの安心院さんなんだけど……』
球磨川がボソリという。

「何か言ったか？」

『え？別にー』

そしてめだかが外を見つつ言う。

「これは、苦しくなりそうだな……」
生徒会室に扇子の閉じる音がした。

第二十三箱：「関係ないだろう」（後書き）

最近良く、設定資料をなくします。

第二十四箱：「揃ったので」

「そろそろ仕掛けようか」
引壞が言った。

「と、言うത്？」

「じれつたいなあ、瀧竹君。」

「申し訳ありません」

まあそれも、と話を戻す。

「残りの二人来るまで待とうか」
「ここにこしてそういった。」

「どういうことだ？」

「だから、そのままだつて。めだかちゃん」

「俺の『パラサイトシーイング欲視力』が効かなかつた”

「相手の能力がわからないのか？」

「いや、この力は他人の視界を覗くだけだから……………」

「そうだったな……………」

『だとすると彼の零ゼロは僕の過負荷マイナスみたいな感じなのかな？』
球磨川がそう言う。

「ああ、そうなるのかもしれない」

数日後

こんこん、と生徒会室のドアがノックされる。

「入っていいぞ」

「すいませーん。両手に荷物あるので、開けてくれませんかあ」

「おう。まってる」
と、善吉が歩み寄る。
すると

ドッゴオン、とドアごと吹っ飛ぶ。

「こつしたほづが早かった」

「がは！」

「善吉！」

めだかちゃんが駆け寄った。

「き、さま！」

そこにいたのは、引壊。

「揃ったので、宣戦布告に来たよ、黒神ちゃん」

第二十四箱：「揃ったので」（後書き）

ごめんね、善吉。

ひどい目ばっかだ。

第二十五箱：「決定いたしました」（前書き）

キャラ名の読み方がわからない人は
人物紹介へ！

第二十五箱：「決定いたしました」

「詳しいルールは後日。．．．いえ、今日中にお教えいたします」
そういつて少雨は去っていった。
引壞たちもいつの間にか居なくなっていた。

「早くて今日中に一回戦が開けそうだな」
めだがが、そう推理した。

「まさか、ええつと、死四師さん？だっけ？

あんな温暖そうな人が零組だなんて」
と阿久根が言う。

『高貴ちゃん何勘違いしてるの？過^{マイナス}負荷とは違っんだよ』
「．．．．．、そう、でしたね」

『真黒ちゃん、彼らの解析、出来たかい？』

「いいや、さっぱりだ．．．．．」

「お兄様が？珍しいですね」

「そりゃ、そーですよお」

さりげなく割り込む一名。

否、二名。

「お久しぶりですねえ、球磨川さん！」

『逆ちゃん』

にっこりと微笑む逆。

「僕たちに協力できることがあれば行ってくださいねえ」
力強い（？）仲間が増えた。

放課後。

「今朝ぶりですね。どうも、少雨です」

「自己紹介なんてどうでもいいよ」と引壊。

「全体のルール、一回戦のルール共に決定いたしました。」

沈黙する。

誰かがつばを飲む音がした。

「全体のルールは、」

『生徒会側が勝利ならば通常。』

引壊様側が料理ならば、この学校の廃校』とさせていただきます。

「

「廃校お？まあ、つまらないけど、いつかあ」

「両者様共々よろしいでしょうか？」

「私は構わんよ」

「それでは、一回戦のルールの報告に参りましょう」

「一回戦のルールは」

第二十六箱：「もうないと思いますけど」

「一回戦のルールは、ギブアップ負けです」

「ギブアップ負け？」

「はい。単純なほうがよろしいかと。独断ですが」

「別にかまわないぞ」

「では、両者様。出場者様を決定して頂いても宜しいでしょうか？」
ああ構わん、とめだかが応える。

「引壊さん、どうしますの？」

「焦らさないでよ、死四師ちゃん。えーえっとおじゃあ、誰か出た
いひと！」

「わたくしが行きますわ」

「ん？死四師ちゃんか。意外意外」
あっさりと決定した。

「選挙管理委員長様。零組側はわたくしが行きますわ」

「では、死四師霊子様で宜しいですか」

「ええ」

どうやら、生徒会側も決定したようだ。

「俺が行きますね、めだかさん」

「ああ。がんばれ。阿久根書記。」

阿久根のようだった。

「俺は生徒会戦拳で足を引っ張ったからな」
ここで挽回しなければ、と。

「はじめまして。阿久根さん？」

「そうだ」

「わたくしは、死四師靈子と申しますわ。

もうないと思いますけど、宜しく願いますね」

と、不敵に微笑んだ。

「戦って頂く会場はこちらの、体育館になります」

ごくごく普通の体育館だった。

「廃校になった学校の体育館ですので、壊していただいてかまいません。

存分に戦ってください」

二人はそれを聞くなり、体育館へ足を踏み入れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・敵とはいえ女性を相手するのはアレ
だなあ」

「それは初めてではないんでしょう？何を言ってるんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・?」

「あなた以前、

『古賀さん』と『名瀬さん』を相手にしていらっしやいますわ。」

阿久根は驚いたように「どうしてそれを？」と問う。

「どうしてでしょうかね？」

その問いにただ微笑むだけだった。

第一回戰。

阿久根高貴

V S

死四師靈子

第二十七箱：「…………作り上げるのですわ」

「この場合」

霊子が話し出す。

「わたくしから行った方がよろしいのでしょうか？」

「え？」

「正直、引壊さんのためといい、わたくし戦闘は好みませんのはあー、と嘆息しつつ頬に手を添える。

「それはこっちのせ　　がっは！？」

背中に激痛が走る。

何か重いものがあたった感触。

後ろをむいても何も無い。

「なっ！？」

「お喋りに集中しすぎですわ。」

周りを気をつけていたみたいですわね」

霊子は悠々と本を読んでいる。

「な、今のは君の攻撃か！？」

「そうでしたら、なにか？」

何をした！？この一瞬！距離は5メートルと遠い！

きよろきよろと周りを確認する。

あるのは、バスケットのゴールやサッカーボールなど体育関係のものだけだ。

「おかわいそうに。」

わたくしの能力に悪戦苦闘してなさるのですね？」

パタム、と本をとじる。

「仕方ありませんわ。」

わたくし、一応人ですので同情して能力を教えてくださいませわね」
にっこりと微笑む。

「わたくしの能力はざっと言って読んで字の『じやくですわ』」

「……詳しく頼むよ」

「せっかちですわね。」

「デザイアート “志望推定地獄”の通り、

わたくしの望む現状

わたくしの予測した現状

わたくしの、造り上げた地獄を！ ……作り上げるのですわ」

阿久根はそれを聞いてもなお、首を傾げた。

「むう。これでも理解不能でしたら、実際に見るだけですわ」

霊子は本を開く。

「こうして、本を読んでいるだけでわたくしの“現状”は完成する
床から黒い影が。

黒い影から出てきた黒い人間たちが阿久根を囲む。

「!?!」

「先程言いましたわ。わたくしは戦闘は相容れませんが」

かわりにその子達に戦ってもらいますわ、と微笑む。

微笑んだ次の瞬間、阿久根が黒人間を倒した。

「な!?!」

と霊子は驚く。

「弱いじゃないか。こいつら」

「……なあって、驚いて見せちゃいましたけど」

言い終える前に黒人間が阿久根を襲う。

「……ッ!?!」

「その子、ちゃんとお習するんですの
そう言って本をとじる。」

第二十八箱：「あるよ」

「つまらないですわ」

唐突に霊子はいった。

「終了。^{エンド}」

霊子がそう言うと、さっきまで出ていた人型のものは消えた。

「……あなた、本当に学習なさってますの？」

阿久根はこいつらが学習能力があるのは承知の上、戦っていた。

「……手を、止めた」

「はあ？」

その気のゆるんだスキに、阿久根は霊子の懐に入る。

そして“本”を奪った。

「これで操作してるのか？」

そしてまた、数メートル離れる。

「あら、取られてしまいましたわ」

不安も何もなく。

彼女はただ微笑んでいるだけだった。

（なんだ？同様なないのか？これに仕掛けがあるのは確かだが……

）

「……」

本は“ボコボコ”と変形し始めた。

「なあ！？」

「あら、始まってしまったんですね。」

「こ、これは？」

「わたくしの能力源、もちろんその本ですわ。ご名答。

ですけども、わたくしの元を一定時間離れますと、

どうしても抑えられない行動に移ってしまいます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「じれったいですわね」

本は次第に人のような姿になっていた。

「これ・・・・は、アブノーマルとか、そういう問題じゃ、ないぞ」

「ご安心を。きっと倒せますわよ」

ニツコリと微笑む。

それと反動し、本、もとい、人間型本が阿久根を襲う。

「お、おい黒神！」

安全圏で見守る名瀬が口を開ける。

「なんででしょう」

「あんなの、倒せるのか？阿久根君は能力持ってねえしよお」

「ええ、そうですね・・・・、私も、少し厄介だと思います・・・・

」

「あ、言い忘れてましたわ。その子は学習能力はありません」

「！」

「ただし」

人差し指を立て、続ける。

「十分強いんですよ」

シニカルに笑う。

不敵だ。

「引壊二年生」

めだかは引壊に声をかけた。

引壊は微動だにせず「何」と返す。

「弱点はあるのか」

「単刀直入すぎるだろ!!」
人吉が突っ込む。

まあ、それはどうでもいいとして。

「あるよ」

そう、引壊はいった。

「……………」

「ただし、彼が見つけれればの話だけどね」
怪しく微笑んだ。

第二十九箱：「どんな」

死四師霊子、彼女は今までこの人生の中、
“努力”というものを知らなかった。

知るはずも無かった。

体育においては望んだ素晴らしい結果。
勉強においても望んだ素晴らしい結果。

いつの間にか彼女は誰にも尊敬も、羨ましがられず、

頂点にたっていた。

つまらない、つまらない、つまらない！

わたくしと張り合ってくれる人は？

わたくしと対等に接してくれる人は？

わたくしと。

お友達になってくれる人は？

「つまらない」

「え？」

霊子はいよいよ口に出してしまった。

「なんでもありませんわ……」

（しまった。つい私としたことが、戦闘中に思い出に浸り、

更には口に出してしまうなんて）

頭の中で反省する霊子。

「あれを倒す方法は、死四師に何らかの攻撃をすることだよ。それか、死四師ちゃんが、あの本を凌駕する程の精神状態になればの話だ」

「そ、それはどういう意味だ？」

そのままだよ、と引壊は言う。

「だから、阿久根君にあの子を攻撃する精神はあるのか、だよね」

「まあ、一回俺らと戦ってんだ、大丈夫だろ」

「そー、だけど！死四師ちゃん自体はふつーの女の子なんだよ！」「？」

「よかった」

阿久根は唐突にそう、いった。

「こいつを倒せば、君の為す術はなくなるんだろう？君と戦わなくて済むんだ」

「はあ？」

（何言ってるんですの？絶対不利な状態で！笑みなど、浮かべ！）
「あ、あなた、わかってるんですか？今とても不利なんですよ！」

「不利？関係ないな。どんな状態でも、条件でも、状況でも！めだかさんは決してあきらめない！だから俺も！」

（おかしい！どうして？努力など無力！）

「そ、そんなの！努力なんて言葉、信じませんわ！」

「死四師ちゃん」

見学モニター室から、引壊の声がした。

第三十箱：「必然でございます」

「死四師ちゃん」

モニター室からの、引壊の声。

「努力なんてしないでいいよー」

否、負ける、という意味だろう。

「引壊、さん……」

（あの子は、続ける）

そう確信した引壊の言葉だ。

「……いえ、わたくしは、最後まで頑張りますわ。

愚か者には、成敗を」

無理に微笑んだ笑顔だった。

先程の阿久根の言葉で、霊子の心は少し揺らいでいた。

“本当は、本の暴走を止められる”。

わざと懐を開け、阿久根に侵入させ、本を奪わせる。

そうしなければ、自分と本の距離を掴めない。

わざわざ投げて距離をとっても、

“暴走が解除できる”と分かってしまいそう。避けたのだ。

（ダメですわ、自分！！）

と、自分の揺らいだ心を打ち払う。

「なあ、おい、黒神。次の出る奴ら決めておいたらどうだ？」

「……そうですね」

「お取り込み中申し訳ありませんが、

ルール、場所、決定と同時に

出場者を決定させていただきたく思います」

流暢に断る少雨。

その言葉に名瀬は顔をしかめた。

「二回戦のルール、決まってねえのかよ」

「いえ、決定しております。場所は曖昧ですので。

それに、どちらも機密事項ですので」

「ふうん」

名瀬は曖昧に返事をした。

「どちらにしろ、必然でございます」

「そろそろギブアップしたらどうですか？」

阿久根は息を切らせ、床に座り込んでいた。

（なぜだ？奴は攻撃してこない・・・）

阿久根を見下ろしているだけだった。

（まさか、制御できるのか？）

阿久根は胸ポケットに手をやる。

『阿久根さん』

ふと直に呼ばれる。

『なんだい？』

『用心のためだ。このナイフをつかってくれないかな』

渡されたのは小型ナイフ。

胸ポケットにすっぽり入る程度だ。

『君に勝利してもらうための、小さな一歩だよ』

そんなことを思い出しつつポケットのナイフを出す。

それを瞬時に投げ、ひれ伏している状態だったので、霊子の足にかすった。

だが、その攻撃だけで十分だった。

本は元の姿になった。

「な！」

「これで君はなすすべはない

さあ、ギブアップしたらどうかな？」

第三十箱：「必然でございます」（後書き）

「二回戦のルール、決まってねえのかよ」
ごめんね、作者的に未定。

第三十一箱：「よくやった」

「ぐ、あ、う」

顔を歪める。

いかにも破顔したそつだ。

「ま。」

「私の負けですわ」

「よし！」

阿久根は力強くガッツポーズをした。

「阿久根書記」

めだかが駆け寄る。

「よくやった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい！」

「死四師ちゃん、お疲れ。頑張ったね。次の子にかけよう」

「はい、はい・・・・・・・・・・、申し訳、ありません・・・・・・・・！」

「何を落ち込んじゃってるの、大丈夫大丈夫、大丈夫だから」

その励ましは、なぜか、不安を感じるようだった。

「お疲れ様でした、皆々様。」

「次回のお話をさせたく存じます。」

「灰屋二年生！」

「なんでございましょう」

「せめて一日ほど休みをくれないか」

「めだかからの提案だ。」

「確かにすぐ戦うとなると、精神的にきつい。」

「了解しました。では、大目に見て二日でどうでしょうか？」

「うむ、引壞二年生、そちらもこれでいいか」

「もちろんだよ」

一回戦

阿久根高貴 VS 死四師靈子

勝者、生徒会側。

第三十一箱：「よくやった」（後書き）

おじく・・・・・・・・長くなりそうです・・・・・・・・

第三十二箱：「疑ってる？疑っちゃってるね？」

生徒会室

マイナス十三組の四人、生徒会委員などを含めた数名が集まっていた。

「昨日退院して初めて知らされたんですけど、今、零組なんていう、敵が来たんですか？」
怒江が口を開ける。

「ああ、そうだ、江迎同級生……」

「で、でも、一回戦は勝ったんでしょう？」

「まあな。」

それに対しては志布志が答えた。

「そうなんだが、あいつらの能力は見抜けねえ」
善吉が言う。

そう。そこが肝心だ。

真っ当になんて戦えない。

むしろ不利。

「かと言って、相手を探るのもないと思っぜ」

「!？」

一同がガタン、と席を立つ。

「おいおい、驚くことはねえだろ？」

挨拶はしたはずだぜ」

刹那遊。

零組。

「あ？俺邪魔か？ああ、帰るよ、帰る」
ドアに向かって歩き出す。

「まで」

が、めだかに止められた。

「なんだい、かいちよーさん」

「……………刹那三年生と聞いたか。」

「そーだぜ。お前さんの記憶力の方が俺より、正しい」
「なぜ、ここに來れた」

単刀直入。

「空いてたよ」

ドアを示す。

鍵ががっちりかかっていた。

「……………」

「あつはは、疑ってる？疑っちゃってるね？」

まあいいけど、とうそぶく。

遊はスライド式のドアに手をかける。

そして、鍵を開けず外に出た。

「俺はまだでねえよ。楽しみにしろよな」

と、決めゼリフを残し去っていった。

「むう、厄介だな……………」

めだかは頭を抱える。

策戦中にあんなことをされては誰だってそうだ。

「なあ、黒神、刹那とやらの能力は、あれじゃねえか？壁でもすり
抜けられるのか？」

「……………としか、考えられませんね」

「でもそれなら、めだかちゃん。鍵抜けたのはどーなんだよ」
そうである。

第一、あいつはいつから居たのだろうか。

第三十三箱：「大丈夫！」

「それでは、二回戦の説明とさせていただきます」

「頼んだぞ」

「二回戦のルールは二人ひと組みで行わせていただきます」

「二人ひと組み？」

「はい。前回出られた阿久根様が出場されても支障はございません。支障がなくとも、それ以前に怪我はまだ全治していない。出るも何も危険なのだ。」

「………それでは、今回は私が……」

「僕らが出るよ！」

「！」

めだかは、声のする方へ振り向いた。

そこにいたのはある二人。

つしろすすみ
逆と直だ。

「………だ、だが……」

「いいんだよ！だってほら、まだ生徒会戦拳の傷が癒えてないだろ？」

につこりと逆が不気味に笑った。

「大丈夫！僕達^{マネナス}だけど、汚く、カツコ悪く、勝ってくる」

「………では、頼んだぞ」

「うん！」

「生徒会側は決定いたしましたか？」

「………では、零組側はどういたしましたしょう？」

「んじゃま！俺と否奈ちんで？」

「いいねっ！そーしよお！」

「それでは、会場へ移動いたしましょう」

今回の会場は、巨大迷路。

ルールは簡単！

迷路の中にある、パスワードを探して見つける。

勿論。スカも入っている。

そのパスワードをつなげ、完成させたほうが勝ち！

なのだが。

相手のカードを奪うのも良し。

なんでもアリのルールなのだ。要するに無茶苦茶である。

両者は対となる、一番角の入口から始める。

両者がスタートした直後。

入口出口は封鎖される仕組みであり、

どちらかのチームが勝たない限り、この迷路は入口出口封鎖されたままだ。

「それでは。スタートです」

第三十三箱：「大丈夫！」（後書き）

二回戦のルールは、
話数短縮のためでございます。

第三十四箱：「遊んできていいですか」

迷路に入ったとたん。

出入口は遮断された。

死をも覚悟の一戦なのだ。

「逆、逆」

「どしたの、直」

「みてみて！お花！」

「ふざけてないで進もうぜ」

直の精神には、逆の冷たい言葉が槍のように突き刺さった。

「……………、まあいいや。はい、パスワード」

「早くね?!」

差し出したのは真っ白で無地の紙切れ。

「？」

ただの紙にも見える。

だが。

直が「これはね」と言って“服で紙をこすってみせた”すると。

文字がじんわりと現れ始めた。

「!?!? なに、これ？」

「静電気ですね。」

「やっぱりそうか。あの直ってやつ、意外と頭いいのかよ？なあ、黒神」

「いえ、さっぱりです。……………ですが、これだけはいえま
す」

「？」

「彼女、天地直は。」

この学園の十三組アブノーマルに入るに従って受ける試験に。

全てオールパーフェクト。」

「はぁ！？黒神、お前はどーなんだよ！」

「わかりません。受けた試験が違うので。」

「……………、ありやどーだ。サイコロのやつ」

「ああ、一応振ってもらいましたよ。」

「んなこた、いいーさ。結果結果」

「……………結果……………ですか」

めだかは言葉を詰まらせた。

何かあるのだろうか。

「せーでんきだよ！こするとパチパチ起きるでしょ？」

「そ、それぐらいわかるもん！！」

「パスワードは……………」

「スカだね」

「逆なんて大つきらい！」

「八つ当たり?!」

スカのパスワードをポケットに仕舞い込み、歩きだした二人。

スカは捨ててはならない。

いつか、絶対とは言わないが。きっと、使うときが来るはずだ。否、持っていたほうが有利なのである。

「遊さーん、行きましょーよお」

「いんや、ここにいれば、やってくる」

「はぁぁぁぁ？」

「怖い、それ」

遊はスタート地点数メートルの場所であぐらをかいて座っていた。

「というかー、誘ったの遊さんの方ですよ？」

もう少し積極的にお願いしますよーお」

「ああ、そーだっけか？」

「こんなんだったら浮竹誘えばよかったな」

「がーん！」

そんな茶番を繰り返しているさなか。

一つ向こうの壁から声がした。

勿論この迷路の中で聞こえる声なら引き算して。

あの双子だ。

「……………遊んできていいですか」

「お好きにどーぞ」

不気味に微笑んだ杏奈の顔は、獲物を狩る狩人の顔だった。

第三十四箱：「遊んできていいですか」（後書き）

試験なんてありません。

第三十五箱：「ころおおおおおす」

「あああ！みいつけたあ！」

「！」

天地双子は、狩人の否奈によって発見された。

ピンチである。

零組の中でも結構積極的に戦闘をする危ない人物。

「うひい、逆お」

「おおつけええ」

変な高笑いを立てている否奈に対し、手を差し出して

「『^{アンリターン}真つ黒な真実』！！」

と唱えた。

すると。

「ふぎやぶー！！」

否奈の顔面にクリーンヒットするよつに床から壁が現れた。

“ざりざりざり”と顔面がすれる嫌な音が聞こえたが、まあ、そこは。

「ひぎゃあああああああああ！いたあああああああああ
ああ」

壁の向こうで否奈が悶え苦しんでいるのが分かった。

「うぎいいいいいいい……、ころおおおおおす！！！！」
殺意も伺えた。

「逆お、閉じ込められたよお」

たしかにそうだ。

二人がいた場所はもともと、行き止まり。

「……、そこは九死に^{ハッピーキラー}一生でカヴァーしてよ

「逆がいるときは^{アンハッピーキラー}九死に一生」、だよ

「ふへえ。どーでもいいね」

ポゴオ、とお壁が崩れる音がした。

壁の隅に逆たちがギリギリ通れるような穴があいていた。
これも九死に一生のおかげだろうか？

「ふええええん、遊さああん」

「ちょ、お前その顔どーしたんだよ（笑）」

「笑うなクソ野郎！！」

「そんなもん、お前さんの否定で治せよ」

「……………」

その手があつたのか、という表情を浮かべる否奈。

「仕方ねえなあ、反撃と行くかあ」

「そう思ってたました！流石、遊さ　いたい！」

顔面にパンチが炸裂する。

これは痛い。

鼻が折れる“パキイ”と言う音が聞こえた。

「ふぎやわあああああ！？折れた！」

「それも治せ」

「どんな試練！？鬼畜！鬼！家畜！」

「俺を豚と一緒にするな！」

もう一発“パキリ”。

「はぎいいいいいいいい！！」

迷路に否奈の叫びが響いた。

「ちょっと、逆！迷ってばっかじゃーん」

「ば、ばかやるー！迷路はな、『迷う路』と書いて……………」

「もう、言い訳とかご託とか、そんなのどーでもいい！

全てはあなたの能力の所為だからね？」

「ふあーい……………」

こちらも説教が続いていた。

第三十六箱：「全部全部全部！」

高川否奈。

見た目、成績は性格と反比例し、とても優秀で秀才で最高だ。テンションの高さと、この性格さえなければ完璧なのである。それとそうそう。この力もだ。

「ニゲイション
否定」

『全部全部全部！否定否定否定！！』

全部否定する！否定こそ史上！否定こそあたしだ！！』

それが否奈のモットー。

今まで何もかも否定して生きてきた。

時には生きることさえも否定した。

だが、それもそうはいかなかった。

否奈の“否定をさらに否定してくる”大人たち。

そんな嫌な“否定”から助けてくれたのは引壊だった。

彼女は言う。

『そんなの一緒に世ココの中から引いて壊そう』

「あたしは頑張る！全部は全部！引壊さんのため、全てを否定するんだ！」

そう言つて、壁に手をつける。

「ニゲイション
否定！！！！」

壁は消えた。

否！半透明になったのだ。

「みいつけたあああ」

「し、しまった！」

半透明な壁からは敵陣二人の様子は手に取るようにして分かってしまった。

当然、壁だけでなく、“捜し物”の在処まで半透明になった。

「トレジャーキル宝探してもはじめよう」

第三十七箱：「絶対王政」

「！」

めだかは今の状態に絶句する。

「灰屋二年生！あれはありなのか！？」

「……私がどうこう言える立場じゃありませんが、
ないとは言えませぬね」

「……………」

「ひってい ひってい お前らの

勝ちさえ、価値さえ、ひってい」

着々とパスをとっていく否奈。

「んっふふ。」

不敵な笑みを浮かべつつ。

「おい、殺すなよ」

「えー？」

「俺だつて遊びてえ」

にやりとこちらも笑う。

「っく！」

「逆……！」

「わかつてる！」

逆は二人に手を向ける。

そしてこう唱えた。

「『アンリターン
真つ黒な真実』」

世界は一面黒と化した。

「な!?!」

「最終兵器だ。ちょっと痛いからあんまり使いたくないんだよね」

「ど、どういうことだ!?!」

「ここは“嘘の世界”。周りからはちゃあんと戦ってるように見えるから安心して」

と直。

まだ二人は首をかしげている。

「この世界での王は、僕。逆だ。そしてこの世界は“絶対王政”。

僕に従わざるを得ない世界。」

「あ、ありえない! 逆境で! 花が咲くなんて! そんなの否定^{ふち壊す}!」

「壊してみな。壊されるのは、そっちだよ」

第三十七箱：「絶対王政」(後書き)

放置しません

第三十八箱：「うん」

「勝者、生徒会チーム!!」

「うおおお、と歓声。」

「はん、相容れないよ」

「あつ、逆お!?!」

すたすたとどこかへ行ってしまおう逆。

「じゃっねー。なんか馴れ合いみたいで嫌だったよ。」

「んもっ!」

「それに僕等過負荷マインナスに勝利なんて似合いはしない

そうでしょ?・・・球磨川先輩?」

「僕に話をふっかけるのやめてよね」

「逆同級生!」

と、めだかが呼び止める。

それに応じたのか、ピタリと足を止めた。

「・・・」

「ありがとう」

「・・・ふーんだ」

その声を聞き、めだかは、ふ、と口元を緩めた。

「さて、次回だが・・・」

生徒会室でミーティング中。

「あといるのは最初の三人か・・・」

「一番怪しいよね」

よし、と球磨川は拍手かしわでを打つ。

『僕が出るよ』

「……………」

一同に沈黙が訪れる。

口を開いたのはめだかだ。

「……………ああ、球磨川。頼んだぞ」

『うん。』

マユナス マユナス
僕は僕なりにさっきの二人みたいに足掻いてくるね』

「そういうことなら、自分が出ます」

敵陣ではそういう会話が行われていた。

立候補したのは浮友。

「はっあーい！頼んだよ」

「お任せあれ」

第三十九箱：「…………いやあ、めだかちゃん。」

「第三回戦、生徒会側球磨川様」

『うん、ありがとう』

「零組側、瀧竹様」

「精々足掻かせてもらいます」

そう、浮友は気持ち悪く微笑んだ。

第三回戦 球磨川襖 VS 瀧竹浮友

『で、戦場はどこなんだい？ゲームでは一番肝心だよ』

「そう急かさないで頂けますか？こちらにも準備というものがあるが御座います」

『……………あつ、はい、ごめんね』

球磨川は微妙な表情で少雨にそう言った。

「それでは整いました。皆様、移動願います」

『はぁーい』

「了解です」

「めだかちゃん」

人吉母がそう、めだかに問う。めだかはそれに応答するように彼女を見た。

「今回、どう思う？……………だって、彼、球磨川君よ」

「はあ、それを承知の上です。負けてもまだこちらには2勝のストックがあります」

「……………、そう、ね」
瞳はどこか不満そうに返した。

『どうしたんだい？僕は後輩に先制攻撃を許してるんだ。さあほら！』

球磨川は両手を広げ、肩をすくめている。

はつきり言つて、これを見ている限り、二人に戦意はない。

「申し訳ないですね、球磨川さん。自分は攻撃専門ではないので」

『ふうーん、じゃあ僕にくれる わけねッ！』

そういつて球磨川はいきなり走り出す。 両手には 螺子。

「……………つふ」

「……………な……………」

めだかの声が思わず溢れる。 目の前の戦況を見たら、誰しもそうなるだろう。

球磨川は、浮友と対の場所。 壁にもたれていた。

「……………失礼。まだ自分は能力を申しあげていませんでしたね」
にっこりと笑う。 その笑みはまさに地獄の化身。

「自分の能力は、スルー・スルー 宇宙不友。

簡単に言つて、蝶ヶ崎さんのような力です」

「んなっ!?!」
めだかの目が驚いたのように開く。

「でも少々違いますね。……大分違いますか?」
彼は人差し指を使い球磨川の持っていた螺子で遊ぶ。

「名のとおり、通り抜けた能力は、自分の物となり、
誰にぶつけるもぶつけまいも自由なのです」
その人差し指でくるくるしていた螺子を思いつきり球磨川に投げつける。

「……九死に一生を得たのか、その螺子は球磨川の首の真横にあたった。」

「……つと、ミスをしましたね。」
ニヤリと笑った。

「ですが欠点があります。ひとつの能力をもっていられるのも時間がある。」

「……と、言う事は僕の螺子も時間が限られているんだよね」

「まあそうですね。つーかてめえ喋んじやねえよ気持ち悪いな」
「……っは」

球磨川は無理に身体をぐぐぐと起こす。 動くたび血が滴る。

「やめる球磨川!無理をしなくていい!」
ガラスの窓からめだかが叫ぶのが目に入る。

「……いやあ、めだかちゃん。大丈夫。僕もこれでも負けず嫌いでね」

へへ、と笑いつつ立ち上がった。

「負けず嫌い?っは。笑えますね。瀕死じゃないですか?そんなので」

『そうかなあ？』

「!？」

球磨川は十メートル前にいたはずが、一メートル後ろにいる。

(な、嘘だろ！？速すぎる!!!)

『これ以上いろんな人に迷惑を掛けたくないんだ。ちよこつと本気出すね』

第四十箱：「僕は優しいから」

『ちよこつと本気出すね』

「……………つは！本気？巫山戯まじげ

」

「つかつは！？」

浮友の体が先程球磨川の居た場所に飛ぶ。体は螺子で張り付けられていた。

「な?!」

『僕は優しいからそれで勘弁するよ。さあ、言うんだ』

「僕が負けました」ってね？」

あの貼り付け状態では“能力”ちからが発動できたとしても使えない。

浮友は「くつ」と息を呑み、

「自分の、負けです」

といった。

『……………初勝利、かな？』

と球磨川本人も笑った。

「……………ツケ」

と言って今の勝利を見ずに引壞はモニター室から出ていった。

「待て」

が、めだかに引き止められる。

「なあんだよ、かいちよおさあつああん？」

嫌々、本当にいやいやに振り向く。

「貴様こそなんだ？仲間の勝敗をみずに帰るのか？」

「ああああ？勝利、敗北ねえ？・・・っは」

「？」

「あたしにはカンケーないね」

「?!」

「クス」

「貴様・・・仲間では、ないのか?!」

怒鳴り散らすようにめだかは問う。

「ぶ、あはは！仲間？仲間って何？いいときに利用できるアレ？あ
っはは！」

そういつて引壊はどこかに行ってしまった。

めだかの後味は悪いばかりだった。

第四十一箱：「甘噛みに過ぎないよ」

戦場、そこに立っていたのは善吉と、無々だった。

第四回戦 人吉善吉 VS 哀来無々

「よお」

その場に入ってすぐ善吉がそう言った。

「よー！」

それに元気よく返事する無々。

(別に悪い奴じゃないんじゃない？……?)

「ねーまだまだ？待ってるだけでも疲れるんだよー」

「ああ、そうかい。じゃあぼちぼちはじめっか」

「そだね〜！じゃ、お願い」

と言って無々は両手を広げ無防備になる。

「……………!？」

「さあどうしたの？おいでおいで」

ちよいちよいと手招きしてみせる。その顔は満面の笑み。

「おやおや、生徒会執行部庶務くんはチキンかい？」

「……………ああ、いきやあいーんだろ！」

そういつて善吉は彼女に攻撃を仕掛けた

数分後。

「つち、なんだ?!一発も当たたらねえ!!」

「んふふ」

慈愛に満ちた目で微笑む無々。

「あたしの力を教えてあげよう」

と胸の前で拍手かしわでを打つ。

「あたしの能力は、『ベストラヴァー孤高の哀人』誰よりも愛し愛される対象。

故にあたしへの攻撃はただの犬猫の甘噛みに過ぎないよ」

「.....」

「ただし戦いには不向き。流石の引壊さんも出すのを戸惑ったみたいだしね」

にっこりと笑った。

あの引壊でも、彼女にだけは孤高ベストラヴァーの哀人により悪役ではないのだ。

「そうだな。あたしに最大のダメージを与えるのは裏切り。最

も。お友達でもなんでもない人吉君には不可能なことだろうねえ」

「.....ツカ」

「だから、ごめんね?あたしたちは引き分けしか無理なんだよ
両手を広げ肩をすくめている。

「それとも、力を解除しようか? 君が一方的に殴る蹴るをする

ことになる。後味が悪い」

「ツカ!わあつたよ!引き分けりゃいいーんだろ!?なあ、めだかち
やん!!」

行成話を振られた彼女めだか。 驚きつつも静かに首肯する。

これにより、第四回戦は呆気なく引き分けに終わった。

次回が、本戦である。

刃物がぶつかる高音。 少雨が最後まで言い終える前に鳴る。

その原因は少雨と引壊。 彼女らの間には二本の短剣。

「……………それも、必然、かな？」

「勿論で御座います。引壊様が何か仕掛けてくるなど、予想が出来ますよ」

「……………心外だね」

両手にもっていた短剣をポイツと投げる。 用済み、らしい。

「さあ、生徒会長さん。始めよーよ」

「ああ、そうだな。死之誤二年生。私はこの時を待っていたよ」

第四十三箱：「引壊さあぁん！」

死之誤引壊　　。

両親はリストラ、倒産のため自殺。

取り残された彼女は親戚の家を点々。　　そうしていく内に家庭内暴力に合う。

学校ではいじめ。　　誰も、誰も助けてさえくれやしない。

もう嫌だ、死のう。　　そう思っふと机にあったカッターの刃を手にとった。

何度手首、首筋を切ったところで死ねなかった。　　手、指は血だらけでなんとも言えないものだった。

その手で顔を擦ったとき。　　彼女は自分の力「死角形^{ダイス}」を手に入れた。

彼女は、零組でありながら、マイナスとほぼ同じような人生を多くついていた。

だが。

「あの人は、心だけは曲がらずにいたんだよ」

モニター室で二人の戦闘を見ていた否奈が言う。

「だから似たような待遇のあたしたちを救ってくれた。零組としてあたしたちと共に生きようって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

否奈の目には涙が溢れそうなほど溢れていた。

「だけど、あの人は、引壊さんの人生はそれだけでは終わらなかつた」

「無理しないでいいから、話してみて」

横には瞳が寄り添っていた。　　否奈は小さく首肯し、口を開いた。

引壊はそれからよく悪運に恵まれた。

家から一步出ればトラックが突っ込んでくる。

街を歩けばベランダから植木鉢が雨のように降り注ぐ。
まさに地獄だった。
そうして彼女はこう思うようになった。

誰かに擦り付けてしまえばいい。

そんな話を聞いている中、モニター室にはめだかの悲鳴が響く。

「つが、ぐああああ！」

「どう？あたしの死のサイコロ！！今の目は1。あんた運良いねえ」
にやあ、と不気味に笑う。

めだかの今状態は両腕骨折。更に両足骨折。

「さあ、立てるの？クスス」

「・・・ふ。戯けが。両腕骨折など、生まれた時から覚悟しておった！！」

「な。なんで！？さつきからあなたに注いでる不幸！！不安じゃねえの！」

「 愚かな」

めだかはそう、一言投げ捨てた。そのたった一言で引壊は言葉につまる。だがすぐにきつと睨んだ。

「貴様は誰にも愛されなかったのか？ 誰にも救われなかったのか？ 誰も 仲間にならなかったのか？」

めだかも睨み返すように彼女を見る。

「・・・」

彼女は無言のままだ。

「違うだろう！誰にも愛されなかった？ふ、では貴様を信頼している奴らは誰だ！？」

誰にも救われなかった？救われなくとも貴様は奴らを救った！仲間にならなかった？では貴様を慕い、今までここまで付いてきてくれた奴らは仲間じゃないのか！？」

「！」

「それを仲間と言えぬのなら、私は貴様を裁くよ」
モニター室から声が聞こえた。 否、もっと近い。

「引壊さああん！私たちは、あなたにいつでも付いていきますよ」

彼らは引壊と十メートルもない距離にいた。

「……………ッ！！」

「それでは逆に問おう。」
めだかは肩をすくめ言っ。

「彼らは仲間だろうか？」

第最終箱

「 なか、ま」

終始無言だった引壊がやっと口を開く。 ぽそり、と消えかかりそのうな声でだ。

「そっかあ、あたしにも、仲間なんて……………」

「なんてじゃないだろう？引壊二年生。」

「……………そうだね。生徒会長さんには学ばされるよ」
ふ、と笑みをこぼす。

「あたしたちは居場所が欲しかった。友達が、構ってくれる、遊んでくれる人たちが欲しかっただ

けなんだよね。結果。 だから、さ

あたしの負けだよ。 この学園から出ていこう。 その代わりに

「なんだ？私に出来ることならなんでもしよう」

「彼らの在学は保証してよ。」

疲れたように微笑んだ。

「引壊さんが出ていくなら、私たちも！」

誰かが声を上げる。 でも引壊には通じない。

「……………分かった。“引壊二年生も含め、在学を保証しよう”」

「あたしはいらな」

「この世に不要な人間は居らんのだ。わかるか？私は貴様が必要だ。」

と、めだかは手を差し出した。

「……………だめだな。あたし、生徒会長さんには勝てないや」

そういつて手を差し出すめだかに応えた。

こうして

零組と生徒会による交戦は幕を閉じたのだ。

六人しかいない零組にはクラスこそは与えられなかったが、彼らに、確実に何かが与えられたようだ。

そう、何もなかったかのように普通の、普段の、平常通りの平和が戻ったのだ。

新しい面々も増え、めだかが喜ぶように目を細め微笑んだ。

「さて、今日の依頼はなんだ？」

すう、と大きく息を吸った。今からまた始まる、生徒会の風を。

F i n

第最終箱（後書き）

さて、新連載の涼宮ハルヒシリーズ×めだかボックスをよろしくお
願います。 <http://ncode.syosetu.com/n5550v/>

じゃなくて、読んで頂いて有難うございました。

このお話は書いてて楽しかったのでもう一度するかもです。誰得。
それではまた、“縁があれば”。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9474q/>

ノーマルによるスペシャルの為のアブノーマルなマイナス

2011年8月7日18時29分発行